

## 中学校の部

### 最優秀賞

#### 我が家のちょっと変わった伝統行事

かすみがうら市立霞ヶ浦中学校 1年 仲澤 美穂

夏休みの風物詩といえば、お盆である。私が過ごしてきた夏休みは、両親が共働きで、兄二人も部活で不在だった。そのような家庭に育った私にとって、お盆は、家族や親せきが全員そろって過ごす、楽しい行事のひとつである。

お盆は、先祖の霊などを家に迎えて供養する行事である。私が住んでいるかすみがうら市では、八月に入るとお墓をきれいに掃除する。この時期になると、決まって母は、「八月一日の朝に、あの世の門が開いて、仏様がお盆までに着くようにと、みんなで出かけてくるのよ。」と説明する。

そして、十三日の朝に、さまざまな飾りやお供え物を準備する。夕方には、お墓の入り口まで仏様を迎えに行き、提灯を灯す。我が家では、仏様が道に迷わずに家に来られるようにと、家長の妻、つまり母が、お線香を道に立てながら家に案内する。お線香の束は、夏の夜の風に吹かれ、すぐに火がついてしまう。熱いと騒ぎながら、お線香を立てていく母の姿は、毎年恒例の光景である。

このようにして、我が家のお盆は始まる。大学生になった兄は、夏休みを利用して帰省し、地元の友人と遊ぶ。しかし、迎え盆と送り盆には、必ず家に帰ってくる。友人と遊んでいる途中でも、いったん家に帰ってくるのだ。この行為は、兄だけでなく、地元の友人がみんな行っているという、少し面白い習慣である。

こんな我が家のお盆には、もう一つ、ちょっと変わった習慣がある。それは、迎え盆を終えると、仏様の前に集まり、お茶を飲みながらワカサギを食べることだ。ワカサギを食べることができるのは、「にしんもち」の人だけだ。つまり、二親がそろっている者だけが食べることが許される。両親がそろっている子供たちが食べることになる。

私にとっては当たり前の行為であるが、この行為が他の家にはなかった。実は、父も結婚するまで知らなかったという。聞くと、母の実家での習慣だった。母が生まれ育ったところと嫁いだ我が家は、同じ中学校区である。それにも関わらず、違った習慣があるのだ。

お盆の間は、殺傷をしてはいけないという仏教のしきたりに習って、野菜を中心に食事をする。一日三回、仏様にお供えし、それと同じものを家族もいただく。魚や肉を食べないという習慣の中で、育ち盛りの子供たちに魚を食べさせるために、考え出されたものだったのかもしれない。また、カルシウムが豊富で、地元名産のワカサギをニシンに見立て、ニシンの代わりとして、食べさせるための先人たちの知恵だったのかもしれない。

仏様の前で家族がそろい、お茶を飲みながら、ワカサギを頭から小さく食べる。この時にしか口にしないワカサギは、塩っ辛く生臭い。しかし、毎年口にする味だ。

家族の団らんは、日常の私たちの話から始まり、両親の子供のころの話にさかのぼる。そして、祖父の若いころの話や仏様が生きていたころの話になるのがお決まりだ。楽しかったことや生活が苦しかった戦争時代のことなど、普段のことから歴史の教科書に出てく

るようなことまで話す。お線香の香りに包まれながら、穏やかなひとときを過ごしていく。ふと、私の隣には、遺影でしか見たことがないひいおじいちゃんが、笑いながら一緒に座って、話を聞いているような気にまでになる。

仏様を身近に感じることができるお盆は短く、あっという間に送り盆になる。迎え盆とは逆に、仏壇のろうそくから提灯に灯を移し、お線香を立てながら、お墓の入り口まで仏様を送る。そして、父は毎年決まって、

「お粗末様でした。こりずに、来年もまたお越してください。」

とあいさつをして、提灯の火を消す。なぜかさみしい気持ちと、心がほんわかと温まるような感じがする。

それぞれの土地に、さまざまな習慣や行事がある。そして、それらの習慣や行事には、行うための目的や意味がある。便利で楽しく遊べるものがあふれている現代では、このような習慣などは面倒に感じることも多いだろう。また、不必要ではないかと思ってしまうこともある。しかし、それは間違っている考えのように思う。我が家のお盆のように、先祖が歩んできた道を振り返ることで、今の私の存在を考える機会を与えてくれている。

私は、これからも学生としての忙しい時間を過ごしていきだろう。そのような生活の中でも、ゆっくりとした時間の流れを感じながら、時に立ち止まり、振り返り、そして前に進んでいきたい。そのためにも、先人たちが築き上げた習慣や文化を大切に、次の時代に、きちんと伝えていけるような人物になりたい。